

水がめに水をいっぱい入れなさい

ヨハネ 2 : 1 - 11



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022 年 1 月 16 日

顕現後第 2 主日

「三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。」

ヨハネ 2:1-2

イエスの母マリアは先に行つて婚礼の準備をしていたのかもしれない。そしてイエスも、イエスの弟子たちも招かれて、その婚礼に出かけました。結婚する二人を祝福するのが目的です。場所はカナ。ナザレの北のほうの村です。

当時の婚礼の宴は何日にもわたつて行われたそうです。村中の人が参加しました。婚礼は大きな、また大切な出来事です。

ところが、その婚礼の宴にとって欠かせないぶどう酒が足りなくなったことに、マリアは気づきました。そのことがあらわになれば、宴は興ざめとなり、結婚した二人も恥ずかしいを思いをすることになります。マリアは裏方を仕切っていたのかもしれない。とても心配して、何とかならないものかと、イエスに言いました。

「ぶどう酒がなくなりました。」 2:3

それに対してイエスは母マリアに言われました。

「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。」 2:4

ここはギリシア語原文では「わたしとあなたとは何なのか」となっています。

マリアは親子の情愛をもってから息子イエスに語りかけているようなのですが、イエスはまるでそのような情愛を断ち切る

かのような冷たい返事をします。その後こう言います。

「わたしの時はまだ来ていません。」

「わたしの時」、これは特別な意味を持った言葉です。それは、イエスの受難の時、十字架の時を指しています。ぶどう酒は「血」の象徴です。イエスにぶどう酒を求めるというのは、イエスに対して血を求めること。イエスは自分の命が、言い換えれば自分の死が求められていることを、強く感じられました。

マリアは今、直面しているぶどう酒の不足をイエスに告げたのですが、イエスはやがて自分が引き受けるはずの受難の時、死の時を意識して返事されたのでした。

まだその時は来ていない。しかしその時は来る。世の罪を除くために（ヨハネ 1:29）血を流して死ぬその時は、必ず来るのです。

「わたしの時はまだ来ていません。」

このイエスの言葉の意味を、マリアが即座に悟ったというわけではないでしょう。けれどもイエスの語調と態度に、マリアはただならぬものを感じたに違いありません。マリアは今の必要のことも、これから先のことも、イエスにまかせて、それに従おうとします。その思いで、マリアは召し使いたちに言いました。

「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」

2:5

これがマリアからわたしたちが学ぶべきところです。マリアは失望せず、急がず、イエスを信じてゆだねました。もしイエスが何かを言えば、それにすぐ従うつもりです。マリアはそうにはっきり決意して、召し使いたちに頼みました。

「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」

「そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。」

(2:6)

「二ないし三メトレテス」。1メトレテスは40約リットルとのことですから、大体80リットルないし120リットルの大きさ。高さ1メートルにもなる大きな水がめです。それは清めに用いるものだと言われています。外出から帰ったとき、また食事の前に、ユダヤ人は清めのために手を洗いました。「汚れを清める」という宗教的意味がありました。その大きな水がめが六つもそこに置いてあった。これはその家の人の信仰的熱心さを示しているように思われます。しかし水が入っていなかったようです。

イエスは、「水がめに水をいっぱい入れなさい」(2:7)と、召し使いたちに言われます。召し使いたちは、水がめの縁まで水を満たしました。

イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」(2:8)と言われました。召し使いたちはイエス

に言われたとおりに、それを運んで行きました。マリアはずっとそばにいて、手伝ったり見守ったりしていたことでしょう。

「世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。『だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。』」 2:9-10

このようにして、イエスは冷淡な態度を取るかに見えて、実はこの婚礼の宴に必要なぶどう酒を、しかも極上のぶどう酒を用意されたのです。

ふと、別のところでイエスが弟子たちに言われた言葉を思い出します。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」 マタイ 6:33

もしマリアがその言葉を聞いていたとしたら、そのとおりのことが実現したと感じたのではないのでしょうか。

ここで、あの水がめのことを譬えとして考えてみます。清めのための水がめが六つもある。信仰生活の熱心さを示している

ようです。ところが、その中は空っぽか、わずかし水が入っていない。これは、この家の人たちの信仰が、外から見ると熱心に見えて、実は中身があまりない、ということではないでしょうか。形はあるが、内実が乏しい。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちの信仰生活。形はあったとして、内実はどうか。しかしそれを反省して、そこで止まってはいけません。イエスはわたしたちにも言われます。

「水がめに水をいっぱい入れなさい。」

あの召し使いたちのように、イエスが言われたらそのとおりにする。わたしたちも自分の信仰生活という水がめに、神への愛と真心をいっぱい注ぎ入れたい。祈りを注ぎ込んで満たしたい。もし、自分でそれを満たす力がないと感じるなら、聖霊の助けを求めましょう。

いつの間にか、水がめの水は極上のぶどう酒に変わっていました。世話役は驚き、婚礼の参加者は喜び、そして結婚した二人は祝福に満たされたことでしょう。神への感謝と賛美がその場を包んでいます。

「このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていた」

このぶどう酒は、イエスから来たのです。自動的にそうなのではありません。マリアの真心から出た心配と、イエスに

従うことへの決意、そして召し使いたちの奉仕が、そこに用いられたのです。

祈ります。

神さま、主イエスはカナの婚礼を祝福して、必要なぶどう酒を備えてくださいました。わたしたちはしばしば力と愛のないことに失望します。けれども、主イエスが「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われたことに励まされて、わたしたちも自分の信仰にあなたへの真心と愛と祈りとをいっばいに注がせてください。そうしてわたしたちが思ってもみなかった大きな祝福に共にあずかるようにしてください。時至って十字架にかけられて、わたしたちのためにご自分の命を与えてくださった主のみ名によってお願いいたします。アーメン